里見八犬傳

第八輯　巻十

へ13
709
48

遠13
號709
卷48

明治三六年十月九日購求

南總里見八犬傳第八輯卷之八下套

東都　曲亭主人編次

第九十回

司馬濱ゐ船虫淫を鬻く
閻羅殿ゐ牛鬼賊を辟く

話表賊婦船虫ハ去歳の夏越後ゐて犬川莊介義任ゐ酒顛二们が撃ち折獨媼内を伴ふく遠く武藏へ逃ま来ゐ豊嶋郡司馬濱ゐ程近き谷山の頭ゐ人の白屋を購求めく才ゑ嫁を宗谷きてより。躰く媼内と夫婦よりて生活のせぎと虚々と半年許ありける程ゐ不義の貯禄をもくも竭く。せん術もなく苦ゐ隨ゑ夫婦竊ゐ商量ゐ七又大悪克を計較ける。是より七船虫ハ十字街妓ゑ打扮て夜毎ゑ濱邊ゐ立りめかゝ客を招ぐ。其與のミ。その懐ゐ東西ゐ構合の折屑をまゝ。舌を咂斷く殺ゐく戸嚴を海ゐ棄ゐ媼内ハ妓有ゐ事ゐて初より。ゐ邊ゑ在り。倘ゐ及ばざるものゐれば

力を勠し拉ぎて走るものありしかバ恁ても人の知ざりけり。以あるか這四下ハ塩竈のミ
ゆく家もあなれバ做まことなき久しからざる。這同悪の虎夫狼妻が天羅の中にありける。
罪も赦ひもなく波に漕ゆく蜑の船あるで今宵も這里に張る網の獲もがなと夕
間聴脚高蟻子の蘆垣に夜風を防ぐ浦寒き塩木竈にて焼明せし火光を花の
夕化粧晏雲らぬ月の假眉も甲夜闇の黒木綿三十振袖四十嶋田五十の錢もて最
らで立て見居て見甚て見る兒の癖ハ潰ても口開遅き底疼き毎もうき地に出て来る
浮も鳥の宵遊びの往還も欲得と倭ある。然バ這司馬濱ハいと鄙びたる漁村ぞけり。道
興准后の廻國雑記に[あの書を宗祇の紀行とするものは非也]「やかねより藻塩の煙り名もぞある船にあり積むちかの
浦人」と咏ましにて當時の光景想像るべし。寔に無下の村落なれども這浦人の生活に
只塩を焼のミにもあらぞ釣漁る便りもあるからねバ世に艾之鰕並之雑魚とて今もなほ名物なり。
這浦續きと聞えたる品革馬驪渋谷の荘ハ當日鎌倉路次なるに麻布五十子大澤の

荘[赤塚の舊名]までも皆這津に遠からねバ諸國の海船折々歇りて交易を做ものあるべし。有恁
けれども日暮まで六友喚ぶ衛の声ならで波濤より外に寄るものなかりしに船虫が賤妓
なりつ。這濱に出てより好色なる彼此の壯佼們が夫と知りて世に旂しきものなれバ鋭にとて
援入られて果敢なく錢を合するものヨタカなり。或ハ又夕越て旅なる人の掖留られて初ハ賤き
果ハ亦他が圏套に乗せられて身を全ずバ夜發に似けるものなるその色に愛香に惑ひて腰に纏ふ
盤費と共に命を喪ふものありしを廻国雑記に載されたる浅草野路の孤屋の石の枕の虚
情いくその人を殺しけん昔も恁やと世の人の後に噂すも情由さへ知りて人中の大蟲女中の毒
蛇世にヨタカなるものなるべしとそ怕まざるものなりけり。あるは是後の事なるを語次に寫すのみ。時に
文明十五年正月二十日のひかるに船虫ハけふも赤黙燭時候より宿所を出て濱邊に立て
客を候つ。左右ハ方九尺なる草葺の佛堂あり二座並びて建りけるそが左なる地蔵右なる
閻魔王の木像あり。なる至徳の年間[後小松院御宇]ものなりけん貝塚なる光明寺の聖聰上人這地を

過りを折網引釣漁る浦人們ハ輪回応報の理りを叮寧ハ説諭して冥福を
薦めり浦人們月毎ハ銭を集め年を歴て竟ハ二座の佛堂を濱邊ハ建立ス
るに地蔵と閻魔ハ佛二體慈愛粛殺異なれども俱ハ能化の教主なり世ハ罪障
ヨワかるものハ死して墮獄の苦ミあり閻魔の廳ハ呵責を受て永劫浮む瀬なしと云
舊悪あるものハ先非を怕き懺悔して心を慈善ハ轉ぜば一旦地獄ハ墮るとも地蔵
廿ハ救まて竟ハ天堂の快樂あり些小なりとも悪事をなハ小悪も稍蘊まば大悪と
なりて免る路なし些小なりとも善事をなハ怠りて小善も良積まば大善となりて果報
あり然ハ地獄も天堂も閻魔も地蔵もなしと皆その心の致ス所なれを他ハ求ム
らんその心ハ求まば佛とあり餓鬼とあり人世ハ釣漁を做ものハ宮戸河ハ濱成弟兄
近くハ淀ハ弥陀二郎あり古ハ佛意ハ愜ふものハ日毎ハ江河ハ網を卸して殺生の罪消滅
ス足ハ暇なるものハ口ハ佛名ハ唱易かり這義を忘ざる與ハ那上人の説薦めて建

ス佛堂なれば誰ハ疎ハ思ハ然も船虫と蝨内の一室ハ忘憚ス地方も
めんと両佛堂の間ハ立在ス客を引く邪淫ハ汚穢ものを人を害して財を奪ふ
罪悪越ハ極まり其ハ戰世の癖なれば法度邊鄙ハ届ずとて神を怒り佛ハ憂ふ
悪鼓那身ハ及ぶハ天道も亦賞罰ハ私なりとのまの間話休題折ふ彼此の壮
佼の廿日正月ハ漁戸農家ハ賑ふ坊賈ハ使る年期未満の小厮ハ遊ぶを
旨とする日なれ然ても調戯を嫖蕩子の那十字街衢を挑んとて来て狎て木兎圓の
木兎ハ引る物狂て前顧後を爭ふ鎗頭尖て突て入る客ハ客
連放蒐ハ鐵炮の左右ハ飛ぶ天外ハ登稠て復の夜を果敢て契る草の床草の
枕ハ草莚片布て袖ハ移香ハ牛の糞を人ハ心ハ憎て酸ハ麝香の臍
樞銭を二百部舎て別まて這全盛も甲夜過て人迹稀ハ成し比連立来れる近
村の者長農圓保田長ハ四十ハ傳ひ篭張燈を引提て譚ひて近ハ

船虫やよと喚くく。喃々刀祢達よりも先づ寄せんと招けども此も阿容ぞ立寄らず是ぞ
那評判高き妖怪なる狐と共侶より張燈抗く船虫の眞容半面はらくと覗るとは莫
半晌許感ず勝ざる面色しく。錫右衛門主妙ぞ乃者世間の評判を耳ず聆けども
又今は初めて往還の人ず情慾を商ず十字街妓ず現罕なる花の顔月の眉可惜縹
致をもちて。怎非類なる世渡りず什生なる人の果やんとすべ領く錫右衛門ずかつ
嘆く嘆嘆て帳八翁の宜ずでく浮世の果ず小町ゆく大雨の溷ず金魚あり塵塚ゆも
生なる美人草なるずあるぞ近屬或の噂ず伊勢浪速津の片頭ず立夜々なる十字街妓の
中ず一個の美婦人あり。そは何処なるやらん火計のめきら知らねども苛栗の中なるに眞
玉ぞとく。嫖客達聚ひ来るその美人をのこ挑こずず約十夜許ずあく竟ずぞ来ぞ
なりゆるそぶ迹ず遺せ歌あり。物の端ず寫着るを知るも知らぬる立寄れまべ。「わざ」
世ず露のう死なのるく。草のむらず濡まぬ夜ぞなき」とありけまべ人皆坐ず嘻くく。

甚麽なる人の身なるしぞ怎形なる死所行をあけんいとく惜かるのえとく。語継ぎ
伝ちゆく。話柄ず做せしぞ。遊莫世ず住る奇談好事家流の作設ける人を哄もも
多なるべ富三なるんと多のよ方僅這妖怪を知りね那浪速津なる美婦人の二十四
孔ず一孔を換く情慾を賣りるも這信ずてそなりるず熟めるも掘出東西嗚呼廉
なるかか廉こけ。とのふを船虫推禁めるやよ喃刀祢達空口利く鄭前をず塞げそ。
延虫戸ず塩焼く辛き世ず方金の東西の時價を外く短冊銭ゆくるず入まべ怎まぐ
客ず傷伝ぞ然しもうち刀のふてべでる風味を知るよ むん徒空賞ず寝ぞそ
安きのぞとなるべぞ迭代よ誘ゆ尚用口ぞ伝るかとのつ躯く帳八の袖を抓て引寄
まべ俱ず駁く錫右衛門細竜ず係りし友鳥を資けく雲時打擇なる。饒なくと
両声ず身を脱まんと前へ引く鍬頭巾ず片髪しなる袖を挑放ず邸舎ず張燈揮
滅して。點ぞく還る素見客卒罷べ。子泣くらんその子ず母も俟らんぞ急ぞまべ先ず

立る地藏の王に錫右衛門。閻魔の帳と帳八も。隨ふや地獄に怖氣ぞく。煩惱醒て菩
提心南無阿弥陀佛と念じつ。御堂遥に拜みても真如の月はまだ出ぬ甲夜闇なれば来
熟る路も家かへりいそぎけり。船虫は本意ならず要時其方を目送りて。噫術なき
翁們が年の差ぞ空口唱きし罰は覿面灯を喪ひて。闇路を辿る鈍ましさてよ是
から来ぬるが実に成る客且燒着ぞ侯んずと獨言つゝ彼此と塩木拾ひて。燃残る火を吹
起も浦風の寒さを凌ぐ程しもあれ野寺の鐘の音響て夜は早二更になりにける登時
船虫は思ふやう。今宵も既に深初たるに阿定りたる錢のまゝ合せて携へ来る薄情さよ然はあれども
野良夫が今まで何者なりけん夜を上日とする世渡りを知るべき這里へ寄着ぬ外に増花
ありそのあ秋然らぬ路に障りやせまし。留めて歎かはずや心のうち。侯不樂しやと思ふて
苦しき胸に立ち焼くや塩木の薄煙立ちはやかて滅ゆく空に吹く風に雲霽て二十日の月は
出にけり。浩処に高暇のぞまざる一個の旅客宿投後れていそがしげなる肩に二箇の

行李を前と後へうち掛て。走り過んとせし程に船虫はやく立迎へて。やよ喃要時寄りたまひ
ね。と喚びて裹包を拔留まくす旅客驚きうち見て又も理不盡たり。何ものぞ夜ふかく這の濱邊に
憚りもなく。殊に女子の單身にて旅客を見かけて留るは宿引する歟然はあらじとならん。と船虫
うち笑ひて。疎遠なる事を宜給ひそ恥しく候へども奴家が良人は武家の退糧人這近
郷に僑居しく。絶に立る朝夕の烟も細る身の病着に臥して一稔あまりになれども竟に世を去りつ
跡に泡沫の残る老たる姑二稔以来蹇足疾の目も亦見えずなりしかど薬の價に術もなみ。
親に隱して宵々毎に這塩濱に立出て。情慾を賣る。親の與に憐愍を垂たまへと口説くを
うち聽く旅客は限なかりける月光よりあはれは宜に趣ある。色さへ香さへ憎からぬ。あな未曾有の
夜の花然しも此二小の價にて。身を儘せんとかいふに當許せまほしき宝の山に入りて空く還るに似
たり。と尋思をしけん莞尓と笑て。原来稀なる孝行實義剛才その情由を聞くからに買て
ともなく情も慈悲も。知らぬ東狄とおもひそ。假寢の臥簟は何処ぞやと問へば船虫笑しげに。

恥ぢ〻〻塩害龍の蔭ゐ莚を布寐のゆ枕這方へ来ませとゆを合ゆく。物の葉陰へぞ伴ひける。
且〻く旅客ハ慌る声絮り立て。這衒妻奴ゞ大胆ゆ。俺の〻舌をゑく退ゆぞ噬断る
ぞあらんむらんと舌尖を傷られく。血さへ流れく疼痛ゐ堪ぞ近曾這濱ゐ出る賤
妓さる所行を者く客を害るゆめりとも笑えゝゞ竊ゐ虚実を試さんとゆゐゐ
とりそ今宵俺旅客ゐ打扮く。引きく倶ゐ臥ゐゞ世の風聞ゐ果て錯ぞ絶ゐ結ぶ
ゆ枕の價廉ゆ娼妓ゐ似けゆ。管待態の大ゆゆぞ舌を吸ゆ吸ゆく噬殺さんとせ〜
て知りぬ世ゐヨヌゆゐ賊婦ゝ俺ハ是五十子の放免善悪平ゆを知ゆぞゆ敵ゆぞゆ。
覚期をせよ五十子殿へ。[illegible]正をゆ牽りそゆく。許ヨヌの賞銭を賜らん動揚ゆ腕を遠せ
上罵りゐ推伏せく。隠持ゆ捕素ゆ縄ゆ七既ゆそゆ細人とくけゆ船虫怯ぞ声ゆ
絞りく忍ひりゆ人ゆの疑ひ漫ゆゆゆ奴家いでゆる悪支を醸ゆゆぐ伯
らんや。ゆぞ住境ゐ入りーゆ。ゆゆの舌の糸断菌ゐ障ゆりんそゆ怪我ゆ宵毎ゐ奴家ぶ

全盛を土妓ゐ娼ゆく。濡衣をそ被せられけゐ惴りて後悔ゆ及復て。
携ゆを突退掻潜ゆ女人ゆ稀ゆ拳の挿ゆ播一播く逃走ゆを善悪平ゆ[illegible]脱
ゆく蒐地ゆ趕ゐ程ゐ後ゐ响く鐵炮の当用音と共伯ゐ憐むべ善悪平ハ背を
胸ゆく撃融ゆく。苦と一声叫びもゆぞ身を轉く仆ゆ[illegible]ゆ船
虫ハ殊ゆゐ胆を潰ゆゆゆ。忙然と者く立在ゆる程ゐ[illegible]種子嶋の小鳥銃を
引提ゆく。ゆゐ這里へ来るめゆり是則別人ゆゆぞ又那悪僕媼内ゆ最大ゆゆ
駢恫牛を逐ゆ既ゐ近ゆく。船虫ハ月光ゐ[illegible]ゆぞと認ゆ〜不勝の歓び再生ゆる心地して。立
戻りゆ[illegible]ゆく。好折ゆゐ媼内王危ゆゆぞ伯ゆ[illegible]ゆ故ハ箇様々々と那善悪平ゆ嬢の
趣一五一十を敷知て。他ハ五十子ゐ[illegible]放免の善悪平とゆゆのぞとよ這方の機密を
鼠着く旅客ゐ做りて来ゐけゆを然ゆゆめとゐ知るよりも者く怒ゐゆを出く。鈍や本
直ゐ者ゆ〜を結果らまゐ没怪の幸ひ後産悩れよ似れども程立より這里ゐハ去かゆり

起臥するハ又何等の故に甲夜より這頭へ寄も来ず世渡種を外にして俺身に空骨折させる心長閑さ薄情さよと呟語かまし〻窘るを媼内听つ微笑て叱りもせず今宵俺が遅く来ねるも亦所以あり這月ハ好鳥も倦ずや才ハ五百六百の仂銭のミ掙まて只酒も呑ハの随に喫ましいで野鶏でも獣も捉て酒菜にせばやと尋思をつけ宵より這鐵炮を引提て廣緒と求獵しかども折が好くて獲ものもあらず空日消して腹立しさに坐なる酒肆に立寄りて腰に著たる銭を限りに飲も喫ひもせし程に夜ハ亦初更に及りしやをら徐く酒肆を立出て冠の松の頭まで来にける路の傍なる農夫の家に夫婦子女迭に罵る声のいと囂しく聞えしかバ心ともなく立寄て背門のかたより覗窺ば夫婦闘諍の最中にて打つ打るゝ泣つ叫びて四鄰を動す闔宅の擾攘其頭の爹々嬭々聚ひ来て打を拄め和解をども妻も夫も酔たりけん禁るものさへ敵とゆひ某と云云と罵り狂へる笑ひ果し奈りけり介程に俺ハおのあらう今這謀劇の折に紛れて何ますなきれの

せざりけるの不獵を補ひがてら好東西も欲得と看廻らし来に背門の内なる牛欄に這亦牛一頭あり全身肥脂澤て逞しきといふべくもあらず珎しき大牛なれバ向でも幸しき逸物之潛と牽出して壹貫轉さバ圓金十枚ハ得易かりなん然ハとて躱て這牛を繿ほどて背門より出てゆきしを一家児なる奴们ハ罵る声にかまけて足响ごれも聞つけず皆執逆上せし折なれバ後々までも知らずやありけん甲夜闇なれバ路程さへ憚りもなく遂走らして這里までかへり来にける折亥中の月の影を便りに還にけるを這の窮難情由を知らぬ人ありて趕逼りぬる事も疑ひの原來手綱を行損ひて怎ハ難義に及びけりと思ひ猜しく此一も猶豫せざり牛の追隊の用心に火索を附たる鐵炮のそ寃錯の獣を留けり這火硊ハ去歳の夏あげて北越に在りし折夜獣の留守の准備にとて童子箇蘭子の遮與ぜしを久しく藏措たるが今宵のを借と役に立ぬ又那善悪平といふ奴ハ五十子頭の放兎なれバ素より好人ならず殺すとも尸骸を躱さバ後安かに奴されども

他のこゝを這方の機密を覗着る人ありやせん然ば翌より生活を更て這里へ去ぬるよ。そは左おき右もおき。俺は通宵這牛を遠く千住へ牽のそめ。售く翌快かるまじ。其も那戸殿を海に流せ後に乞べ。倘牛主が趕蒐来ば亦復綽の難義に及ん要時ありともその牛を推隠せそよ。やを四下にあろを屬むやと。詞せゆく其さ示を船虫听く笑げに寔にあるは好牛こ什麼何処へ隠せべと。問く俱に彼此と省り顧る磯邊に塩焼の豪屋あり。夜は鎖せ成る人あけまば見究竟と。媼内が立ろて鎖を操開げば船虫もゆ偽く牛を豪屋に牽入をけり。浩処に六尺棒を引提く這方へ来る者あり。媼内遥よの人ぞ。他を必牛の主が。趕蒐来ゆるにあらんぞ。俺は權且躲ひて遣過しく那戸殿を流さんと其は其頭にぞるとも氣色に悟らるとゆふ。とろろ沼さの廟鷺堂の背へそく躲をけり。程もなく果ぞ一個の農戸年歳は四十許なるべ。面の色は赤黒く。熟せる棗を重ね如く。身材は最高く。港に建る檣に似ゆ。昔當麻の強力土蹶速とものひへば死面魂の逞けるに奴怒りに堪ずも圓なる眼光いと凄く。右を省り左を顧り来ば船虫に声を被けく。喃支河ん濱立人和女郎は世上の尊ぶ。十字街数に有ぞ方僅赤牛を逐走らく這里を過りしあるべ。何地の人ぞを認ぬと。問へば船虫頭を掉く否然る人は去向の路の違ひ。人快々外を歩ひ。と問へども去ぞ持る棒を杖に衝き立沈吟して。咱們は麻生に隠れ。冠松の頭なる農戸鬼四郎とゆふ。俺が面のいと赤ければ村人們が渾名を搭しく。赤鬼四郎と喚做しゆ。家は年来豢狗一頭あり。地方に稀なる逸物なれば村人們が亦件の牛に俺名を搭しく。赤鬼四郎と喚做せども久しくあり。然ば地方で人鬼とい。則俺事にく又牛鬼とのふと。俺牛と知らぬのなし。恁る名物なるに。耕転のうへ車を掛くも荷を馳しても尋常なる牛二三頭の挽ぎに

倍く俺與よりも大きなるぶまに憑りたる限りもあるぞ。けふ二十日正月ゆく。人も俺も遊ぶを旨とするほうろ。牛ゐも骨を休しと咱们夫婦ハ日の暮るまぐ。酒うち喫くる樂盡く。不圖せ一口說のもるまより。毆ハ罵る迭の醉狂ゑむ四鄰を驚考る。綷の紛まゐ盜児ハ背門より牛を牽ぜ一けん綷鎮りて俺牛鬼のわるものを稍知りそさて捷鬼ゐるを勿論這里まぐ路まぐ人々ゐ問試ゐゐ甲夜間ゐ一ゐ炬も點ぐ牛を牽く一個の男の慌ゲゐ司馬濱のくゐ紀ゐ。

きとのヨヌかりけるゐ甲夜より這里ゐる和女郎の。ゐぐとゐゐ胡論と詰るを船虫冷笑ひく。そゐ宜るとぐう。猫欲鼠でゐるゐ目ゐ拠ぐるもわりゐん最大きゐる牛の牽まく這頭へ来さんゐ詎ゐ目外ゐ伯るゐ。司馬ゐゐ廣かるゐ。這里ゐ濱でゐんや上中下と幾町ゐ長き浦曲を彼此とゐも渉獵らでゐんゐの牛の必這里へ来るとゐ。夢でもんまるゐ。奴家ハ牛の張番人ゐ央まるゐゐを鈍ぎ一さ

よと。口ゐく。窘らまく鬼四郎ハ腹も立まぐ舌うち鳴ら一。低いゐまゐ術ゐ。ゐゐ又外を渉獵ゐ一。盃ゐゐ紀と呼きく。婦去んせ一程ゐ那牛鬼ハ這年来听も熟る主人の声を知りけん豪屋の内ゐ一く忽地高く吽と鳴く。声ゐ駭く鬼四郎。其方を伝と見ハ俱ゐ驚く船虫ハ折ゐゐ。と氣を閉く。裏く胸を鎮めるも。鎮らぬ牛鬼ハ両三度鳴く声の疑ゐぐもあ一ざまゐ欺び勇む鬼四郎他を正一く俺牛ゐ那首ゐ隱一ゐ措きゐぐう。悍々ゐくも欺きゐる。這術妻奴も耦賊ゐん先牛鬼を出一来く。虚實を糾さん覚期をせよと。敦圍猛く豪屋の戸口へ寄るを船虫推禁く。漫ゐゐゐゐゐ他ハ這頭の浦人ゐ塩木を駝ゐる牛ゐゐゐ夜ハ那菰屋ゐ繋ぎくわ。司馬ゐ牛のヨヌかるゐ。ゐの牛のく鳴くものゐ。といなもわゐ鬼四郎ハ怒まる声をゐ立く。這賊婦奴ゐ大胆ゐる。這期ゐ及びてゐゐ云云と偽るとも詎ゐ听ん妨げまゐと暴ゐゐ携ゐを振断突倒一く再找む豪屋の板戸を推

開んとせし程ゐ後ゐ响く鐵炮ゐ斃まさく仰反る鬼四郎血烟立てゑ死でける。既ゐ
ゑく媼内ハ閻魔堂の頭より。綽の破まを覗知りて。脱ぎかゝりとゑのゝゑ又鬼四郎を
斃仆ゑる。鐵炮引提さ出さゑ。稍身を起せし船虫ゑ腎の沙をうち拂ひて。
却も今宵ハ折の反さよゐん身ハ那放免ゐ謀らまくるを悟らむしく。行損ゑ趨綢
らを。咱们へのめせし赤牛の鳴ゑる故ゐ綽發覚まくとり復さるべゑ勢ひをうしゐ這
鐵炮の微りせバ何をもく二度の祟を恁立地ゐ禳んゑ。今宵の挿どハ是ゑ老ゑんゐ
両個の戸殿を海へ流し牛を千住へ牽ゑそゑんゑ身ゑ宿所へ還りねかしといへバ船虫
頷きく。那畜生ゑ鳴ゑもわゝバ甘く哄くいゑさんと。ゑのゝのを声立く。已ゑ所在を知
せし故ゐ鬼四ゑ斃まさゑ。鳴ゑ雄子も斃まさゑで。求獵ゑおゑ春の野も
此の濱邊も妻恋ゐ浮まく係る好鳥の今もわゝん狄料りかとゑ。ゑゑ夜深でハ
ゑゑのめを生ゑの戸殿を棄ゐめと送ゐ潛さ相譚ゐ折ゑ遥ゐ見る小張燈高曖の

かとゑ。浦邊を這反ゑるのゑ。昏のゑく明かりける月を便りゐ見ゐ腰ゐ
両刀を佩ゑ。旅ゑ武士ゐわゝんゑ頭巾目宵ゐ細小ゑる行裏を駝搭ゑ。登時船
虫ハ遽しく媼内ゐ袂を引くゑ。是他ハ好鳥ゑゑん狄快立迎へく素引さ見ん戸殿を
隱しゐゑゑとゐ媼内ゐ入ゑる。四下ゐ窺ける破占をゑ合ゑ鬼四郎と善悪平の
亡殿ゐ二三枚うち被く。又鐵炮を引提ゑ。その刃ハ再閻魔堂の檐下ゐ退き伏躲
まく。綽の容を覗ひける。小程ゐ件の武士ハ連ゐ。ゐゑ夜の濱邊ゐ立ち人ゑ知る
ゑゑ。走り過んとせし程ゐ船虫ゑ立迎へく。やゝ喃要時寄せゑとゐひゝ袖を援
留まハ武士ハ驚き見んかゝて怪ゐ仆ハ甚麼ゑゑのめと問へバ船虫ゑ微笑く取
ゑ親の與ゐ情を商ゐ媚妓ゐ仆ゑゑ。戸耳ゐ覚ゑゑりけん武士ハ引提し小張燈を
推抗ゐ佶と看く。ゑゑゐ汝ハ船虫狄小丈吾ゑを知ゑ。と名出も果ゑ存ゑをゑて
搔合ゑる頭巾ゐ堂ゑゑる。相貌威風今さゑゐ紛ゑゑもわゝゑまバ船虫ハ吐嗟ゑゑゑる。

駭怕まさく逃んとせ〜を小文吾透さず張燈を掻遣捨つ猿臂を伸〜く項上抓さ引寄せく小脇ゐ締く動せず怒ゐ堪へず声高ゆゐ躰虫汝ハ越略ゐて俺を刺んと者〜ふそのゆ竟ゐ成らず七庚申堂ゐ囚まを更ゐ犬川荘介を欺きゆ資を汚て宿所ゐ送らを還りゆその夜廿八酒顛二仂ゐ荘介ゐ較まを〜折汝ハ者ゆ知りて媼内と狡ゆの支黨と俱ゐ逃亡うけるよりも生拘の小嘍囉溷六穴八ゐ招道ゆくその明旦知るといへども往方分明ゆらざまゐ遂憾くゆゐ這里で遭ひを天の冥罰掙れゐを今番ハ脱さず觀念せよと罵詬く大刀の緒もゆく解出ゆつ両手を背へ捩枉げて者細んを〜程ゐ閻魔堂の檐下ゐ躯を〜媼内ハ這為体ゐゆ駭けども些も驚ゐず件の武士ゐ名告るゐよりて小文吾ゆを知りて狙較ん潛歩まゆく下壇ゐ登り尻ゆ掛く持る鐵炮今ゆ直ちゆを者入る両鐵九程ゐそよりを〜繋すけ恁る折ゆく堂内ゐ閉籠りくる一個の武士ゆ朱鞘の両刀苛ゆく目皆ゐ戴く編笠ゆも脱ゐで前ゆ剛窺

うけん今媼内ゐ鐵炮ゐ火蓋を反んを〜処を裏面ゆ簡子戸疏開ゆく顕を出ゆく媼内を撥抓ゐ仰反〜く鐵炮奪ゆく投棄ゐ駭叫ぶ媼内ハ乾鳥ゐ捉ゆを〜猿より脆く。掙扎くを宙ゐ吊揚く礫ゐ弄く投ゆけるゐ十間ゆまる前面ゆる地藏堂を衝ゆ着らを〜く。下壇ゐ撞と倒を〜ゆる郷音さゐ外を簡子戸の内ゐも亦是一個の武士ゆ。本尊の御前ゐ立ゆける形貌自然と顕を〜く此彼俱ゐ一對ゆる笠深くを〜微行の打扮起人とゆる媼内ゐ走ゆ退りゆ蹴返〜く背を踏ゆく動せず嘯くを呵々とゆち笑ひく絶く久〜ゆ悪僕媼内俺ハ相識ゆる犬塚信乃と晴を定やくゆ名ゆと告ゆく笠を脱捨ゐ閻魔堂ゆ一個の武士も編笠の紐解捨く徐ゐ下壇を降りて来ゆ小文吾ゆ向ひて對ひく危かけゆる犬田生俺ゆ黄昏時ゆく這堂内ゐ在りけるぞやと報るゆ亦是別人ゆ〜ゆ犬山道節忠與ゆ登時大田小文五郎ゆ。船虫を細ゆを左右を見かゆる不勝の秋びゆゆ荒ゆとゆち笑ゆく〜ゆ折ゆく犬山主犬塚主も何等の故ゐ通夜籠りゆく〜ゆを〜ゆ間ゐ間ゐ信乃も亦准備の素りを

目前地獄
二兒就戮
冥府の
鬼四郎ゞ牛鬼
信乃

媼内を。毒々と細めて地上に礫と蹴落し。七その身も其首に下立く小文吾に對面を浩
處に荘介現八大角の三犬士。小文吾ぞ歩の毒さに疲れも遠に後れく。稍這処来れば是
小文吾やと喚聚合く。邦船虫媼内を生拘りて縛の顚末并に信乃と道節の資助を語
る。ひまでも。箇様々々と説示す。荘介現八大角は听て齊一駭嘆して信乃道節に對面ん。
俱に歃ひを演て又の夕。某们は犬田と俱に箇様々々の事に大法師の迹を慕く。指
月院を出て。殊さらに路次をいそぐ。昨夜も八王寺に宿を投め。今朝も未明に立て石原
驛に来る。折。後に人の相譚を聞て四谷の辺に盖。矢口より高畷を投く司馬
濱に赴く宜かんとのひけを。俺们四名皆うけ。倶に後方を分て迹を来る人は
今の兒若是神の示さるか十字占る狀と。路の遠きを厭ふと。矢口まで来て日は
暮なん。非如夜半に及ぶとも。穂北に到んと。剛才這浦に来る程に犬田は素より速
行く。連に先に走りかひに怨を果し。這賊婦を生拘りて料も両賢兄の

資助をうけて媼内の銃向を脱れ。石原驛に伏る前兆虎に化るを。寔に愛
さるべきと。倶に祝し已ぬれば。小文吾然とうち合点く。俺们は這濱邊に来る。右に
如し。大塚大山賢兄達の這里に在りしいかく奇を向に。もの義を問ひ。かとあるを
暇なり。何等の故にぞと。問ふ道節声を低めて。その疑ひあるは該に某は大塚と俱に約
束あるにより。這里に人を候て久しく。ひそかに秘密の事を語まんとすれども端的く
忽諸に。去ぬ這個牝牡の二賊。這奴们は人を殺せと犬塚も厠窺けり。その崖裏に諸君
子に毅知しめんと。信乃は領きて。犬田大川犬飼犬村四位の弟兄。听更各々は這賊婦に
歃血して。然はその妻恋の趣を詳に知る所あり。船虫は去歳の夏その
良人酒顛二们。犬川生に撃れて折支黨の兇賊媼内と共倡に越後の隱宅を逃亡る。
その綜の趣は曩に犬飼犬村生に。大法師を安うとせいぬ。比の消息を某们は聞て知り。
任而船虫媼内は遠く這地に脱て来て。夫婦に做りて恋を旨とし。その趣を箇様々々

恁々のものわりけりとく船虫八十字街妓ゐ客を誘ふく殺しく金を奪ふ今宵八放免善悪平とらへんものゐそのゐ段を見顕さまて縡の難義ゑ及ひ折堀内ゐ窟牛を牽いかゐ来て鐵炮をもて善悪平を撃ち殺しるゝを詞せく説ゐ又堀内ゐ指さて這強盗ハ麻生多冠松の頭ゐて鬼四郎とゐ農戸の駐綱牛を窃略く牽ゆく這里ゐ来ハ折那鬼四郎ゐ趕蒐来ねを船虫ゐ欺きていをんを程ゐ豪屋の内ゐ隠牛ゐその主の声をゆ知りけん忽地ゐ鳴ゆ叫ぶそのゐ縡も亦発覚ゆて復さんとゐ堀内ゐ這里ゐ来ハ鬼四郎を撃ち仆しゆ甘木们ハ堂内ゐてその為体を窺窺ゆて怒ゆ堪ゑ走り出く捕捕んとゐ折犬田生の来ねるゆ夏のゐゐ及ゐと報まゐ小文吾歯を切りて這船虫ハ三ゆび老弱盗の妻ゐ做りて悪を貪けゆとゐゆ某を害せんとゐるゐ一度ゆ及びゆ類稀ゐ賊婦ゐそと敦圉猛く罵ゆ現ハも亦奏を捺てと這奴ハ三ゆび盗賊の妻ゐ多くゐるゐ赤岩ゐて妖怪の後妻ゐ多くて犬村生夫婦を窺ひ

剰ゐ逼りて貞女を害ゆうとゐゐ壮ゐも眼を瞬りて去年ハ咱们を欺ちく庚申堂より隠宅へ送ゆ〜ゆける報ゐ酒顔ゆ三ゐの餘ゐ小賊まく刎ゐ来れども這奴ハ逃亡をいとも本意ゐ多ゆ天罰時節到来て擒獲らるゆ愉快ゐ寔ゐ珍重々々と齊一勇むゐ中ゐ大角ハ嘆ゐ獨嘆息ゐ氣色ゐ猜ゐ船虫ゐ大角ゐ對ひく犬村主ゐの年来奴家ゐ多ゐ罪過の後悔及びゐけゐども母とゐゐ子と唱へゐる好を忘ゐゐ命乞ゐく多ゐゐ小とゐゐ大角ハ眼を瞪ゆ一声ゆ立て噫毒婦奴ゐ何をゐゐ俺舊里ゐ在り時親の仇多ゐ妖怪ゐ魅ゐゐ汝を継母のゐゐ妖怪竟ゐ露ゐく親の死を復ゐ折汝も許ゐ兎ゐ多ゐ縁連を犬阪生の仇ゐ知ゐ又汝ゐ阿佐谷ゐて犬田生を害せんと謀ゐるゐ知ゐけ是ハ郷縁連ゐ請ゐ儘ゐ多ゐを預け遣ゆう。ゐれ生ゐ悔ゆくゐゐく這身ゐ干るとゐゐ今俺嘆息ゐゐゆ〜ハ汝も亦堀内も飲を啖ひ衣を被る皆ゐ世の人多ゐども心ハ虎狼ゐ弥倍く

毒悪類まさかぬを怕るこゝろの所以なれ。鱗むとも猜せず。欲無慙の癖者とけり。と責
るに信乃は推禁めて。這期に及びて議論は要なし。媼内は四人の原れて主の洗雪奈四郎が
疾を負て盤纏を奪ふて逃亡さる。蒼悪わり。恁ばその罪船虫と勝劣の亮めて推並
べて八創に斬切まく悪を懲さんと今さら猶豫まるものゝ。道節領はそれ勿論のこゝろ。
牽生めども劣りくる這奴どもを上君子のもふ甚可惜。刃を汚す牛刀をもて鶏を割く如く
ゆゑん牛といへば媼内は窃み牛は那首をわり。他が與めも這奴どもは主の仇敵ぞ牛が突
きくるの隨に苦めて誅戮せん箇様々々に謂ふ。と諭せば小文吾現八莊介ともに応
ふ刀を附る小刀をもて船虫と媼内が衣の背條を破る。信乃も亦倣ひて小文吾と
共に船虫の黒髪の筆もて這賊夫婦の背へ罪の箇條を上書。約束を寫着く閻魔堂の
檐前に二株の杉へ推並く旋毛纏をうける。登時道節は大角を誘引く菓屋を隱し
置きて牛を這方へ牽よせけり。介程を船虫は尤まるに罪過を。ぐ小文吾大角とも

恐ぢて罵り狂ひけれども既に死刑を莊ぢて。ふ魂を衰果く只媼内を見交てのみ。又媼内は
道節が太く拔らぬ時。胸を撲せ骨を折くに声立ぶ一言半句もものいはず面色土のごとく
ゆゑに才が息を吻こそう。道節こゝを左見右見て五人の弟兄ぞ。這船虫媼内は尋常の
罪人にもその悪古今に稀なるに身は生ながら地獄に墮ちる。今這閻王殿前に牛の角が
辟ける前面に地藏わりしかとも救ふ。大辟の讞断恁ぞあるべけれ。といへば信乃は牛の
身邊に拔こ寄つはらく見て。鬱ぶ這牛のまとゆゑ鬼四郎がこゝに誘りて。初く
知りぬ。そもそも逸物なれば村人どもの名を搭ぶ牛鬼と與倣ぶも名詮自性
牛頭馬頭冥府の獄卒が擬ぶるに自然の妙契。畜生とのおろかに這義をもて主の
仇敵。賊夫賊婦と辟けり。ぶを見て。と叮嚀が諭せば小文吾現八は牛の後に立ちくるを
の尻を礫と指つ拍ぶ。勇む牛鬼のそいつ媼内と船虫を化と睨へる。程なく那を
這ぶの長尖る角をもて腋下より肩尖まで串ぶ辟く怒牛の勢ひ地獄の呵責を目前に

受く苦む船虫媼内眼血走る顔の色赤くなり又暮くなりて順ふ波うち大叫喚串をと
数番ふて安き息絶ゆ者繋ぎ留まる勇む六大士も這光景を粛然と為ぬ目を合ひけり。

第九十一回　鈴森ふ毛野縁連を撃ち　谷山ふ道節定正を射る

登時小文吾信乃道節ふ対ひて某小千谷ふ旅宿をする去歳の四月ふ二十村ふ
闘牛の折暴牛あり。その夜小角力磯九郎ふ船虫酒顛ふ殺さるゝふ今宵ふ這赤牛が
船虫媼内を辱ふ主の怨を復すを那磯九郎の與ふも恥を雪るのふ似うて天網疎ふして漏
さぬ悪報かくそあるべけんと云へば道節點頭く其頭の餘談もまかんを要緊要ある密議あり
約束ある快船の今ふ来ふ比ふ比ふ牛を樹下ふ繋留めて一圓這里を退くべと答る詞も
訖らぬ折ふ波濤を推断る快船一艘這塩濱ふ漕着て暗號の哨子を吹鳴せば道節信
乃ふ応ふて走りて水際ふ赴く程ふ舳前ふ找む壮佼あり是則別人ふ非ず落魄餘之七

有種と道節信乃ふうち對ひて曰く郷尚ふ示さるゝ如く某穂北ふ走かうて豫一味の衆人ふ
よりを告相俱ふて速ふ准備を整へ這義と知ふ為ふ某ふ快船ふ乗走りて
目今着到致す又衆人ふ五六艘の大平駝ふ熟乗て推續きて来ふ設てふる道節教べて
その速ある隊配と某ふ大塚と倶ふ黄昏より這里ふ到り専来船を俟程ふ料ぶも小文吾
荘介現ふ大角の四大士ふ甲斐の石禾より来つるふ遭ふて有恁ばいと便より。那人々ふ對面
去ぬ今ふ進退を議せんとせば信乃も有種と主僕と篝高師们を労ひけり。介程ふ荘介
現ふ小文吾大角ふ牛を樹下ふ繋留めうち連立て来ふけるを信乃道節ふ這四大士ふ
有種が来ふけるを恁々と敷知して齊一船ふうち乗りて高畷のうへ漕ぎけり。登時荘介
小文吾ふ現ふ大角と共倶ふ有種ふ初對面して、大法師の迹を慕ふて甲斐より這里
を来ぬ折道節信乃の資を得て強盗船虫媼内を誅戮する趣を箇様々々と敷
知せば有種耳を傾けて手紛よりぞ喜ぶ日く道節ふ小文吾と自餘の三大士ふ

うち對ひ声を潜めて某が大塚と共に塩濱なる堂内にうち篭りて在りけるをあらぬ方にて
ぬるまけん言脩くも初より詳に物ならん某けふ料ぜも湯嶋の天神の社頭迄大阪毛野に
邂逅たり。他に豫て彼に似ぜ額髪を剃落し。坐禅師物四郎と云ふ假名にて虎黒子を
除く藥と磨石歯砂を賣るをのヒヨ〳〵人を聚め合てまり。傷に人のあるを七名告るに眼ぎり
ぬ。犬阪ぬ〳〵と猜せ〳〵人相手相を論ず破りてその才学を試しに多くは倍々舞論
奇才某們が及ぶ所にあらぬ既に甘味を相して大望あるよを見者せも亦奇〳〵ぜも
便り乏かりけまば果敢なく其首を立別まさく必ずとも潜ぬに取て返してそが頭なる茂
林の中に伏躯まさく。彼の容子を覗ひに便宜の密談を多沼うその故に箇様々々と
百堀鄭三が愁訴の與に越後より来て湯嶋に毛野に掌相を問ひるのまに云ふ次
圓太が淫婦奸夫に誣られて片貝の獄舎に繋まれ〳〵の綜の趣木天莫々丸の短刀の
るの嗚呼善士大人一ぞ伎倆志詳に知らまし折鱸目前の社参のそが龍愛の猴の

たるまに毛野が食へまるを功をして次圓太を救んと請けに綜立地に充さまに鄭
三が鱸目則の使者次通に相俱に越後へ去るの低て河鯉守知が鵜に毛野の武
藝を試に豆の朝用に縁連を撃せんと謀りの那縁連に三稔以来定正に仕へ重
用せられて今番相模の北條家へ使者として赴くるのその奸險の行状まさの折具に多
へ〳〵毛野に教び意外に安く那縁連に年来求るの仇なるよりさてその身の素生
實名まで守知に告知せく豆を契りて遠く立別まるのまでも聞見に隨に説示せば
小文吾荘介自餘の黨にまぐ遇見伝現八大角有種さに推並て毛野が孝感天助を
得く面を認らる寃家の呼在を詳に知るのまに撃捕る便宜に値ひけるを齊一感ぜ
ぬ中に小文吾と荘介に那次圓太の横難を毛野が微妙く救ひに復沼〳〵と欽び
ぬ。登時道節大の〳〵既に諸君に知らまし如く角谷定正に俺舊君の仇なまば
昼裏に白井の效外に撃果さんと欲せに逃に敵に謀らましてその綜成らば人に五まり

去るゝ去歳の玖月より穂北に旅宿をつかまつりて五十子の城内を覘ふ便りをうかゞ越ゆ
海と復讐の密議を犬塚落魄仮ゆの示しを是と非を問試ゆ犬塚ゆの説を否と七
竊に諫らるゝ然とて已べるの考ねば密々ゆ那城の頭ゆ近つ近幾番か虚実を知
まく欲せ〜かどゆいかゞ便をうかゞ〜ゆけの料ども守如の密議を伺ひ竊ゆ窺ゆ豆犬改ゞ
復讐の緯の趣五十子の城内へ伺ふ定正必ヨ勢を出て毛野を撃ん〜とせるを
べ。その虚ゆ乗じて短兵急ゆ那城を攻破らゞゆ唖て定正の首を捕ると易かりてん。
曩ゆ豊嶋の殘兵の落魄生ゆ従ゆ穂北の氏ゆ〜の無慮九十餘名あり。這精
兵三十名を分ちて大阪の援ゆ做もべ。その餘ハ俺隊ゆ従へ。便宜の処ゆ伏躯を一舉ゆ
城を攻破らんと等思をつく穂北の宿いそぐ前路ゆ折もよき上野の原の頭ゆ犬塚生が有
種子と倶ゆ来ゆ遭ひゆ緯恁々と具と生じて准備の與ゆ有種を穂北の宿所へかゝ
遣し某ハ犬塚と共ゆ司馬濱ゆ赴きて落魄生ゆ約束をる佛堂の頭ゆ〜り冬〜の寒ゆ

初春の浦寂寥ゆ黄昏ゆ疾潮風の堪ゆ〜ゆ兵ゆ笠ゆ脱ゆ某ハ閻魔堂ゆ閉籠り犬
塚ハ地蔵堂ゆ籠り〜船方の船を俟〜料ども賊婦船虫悪僕媼内を誅戮ゆ大田大川
犬飼犬村四個の同盟石ゆ来るゆ遭ひゆ錦の上ゆ花を添ゆる辛ひと二五一十を説
示ゆ齊一勇む小文吾壮介現ハも大角も倶ゆ賛嘆の声を沿断ゆその隊配の速急を
稱ゆ有種を旁ゆ〜ゆ当下信乃ハ壮介仮の四大士ゆうち料ひ今犬山ゆ〜ゆ如く某ハ初
より復讐ゆ議を諾ハゆ縦犬山その舊君ゆ忠ゆりとも大敵ゆ當り〜戰攻做ゆ〜ゆ里
みとの見殿ゆ對〜まり〜不義ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ大山ゆ听ゆ〜ゆ緯ゆ及ゆ〜ゆ某今ゆ義ゆ與ゆ
性命を惜ゆ只大山ゆ力を勢〜扇谷定正主を撃〜大父ゆ成ゆ嘉吉の怨を復ん〜と
ゆ〜ゆ〜ゆ然ゆ〜ゆ那大阪ゆ助大刀ゆ。亂智萬夫の勇ありとも〜ゆ〜ゆ家縁連ハ同
行の勇士三四名伴當ゆ連く百餘名ゆ及ぶべ。ゆ〜を一辟月の力ゆ救彈ゆ〜ゆ有恁ゆ先
某ハ毛野を援けん五十子攻を先ゆ〜ゆ〜ゆ難く胸中區々ゆけゆ辛ゆく石ゆ

より四君子来會あひけまで綽十二分ふ宴ふ賀もべーと祝ぜば小文吾合笑ふ。その義ハ心安かるべー犬阪ハ石濱ふて讐敵馬加常武一家と鏖金ふ在る本夏あり。縁連ヨヲ人數多とても敷ひ果さんと疑ひあるとを壮介推林ふ也。然るひそ大田生那犬阪ふ石濱ふ許ヨヲの仇を救殫せ。ハ一家児を夜襲ふ。寛家の主僕醉臥ふまで皆辟易ふて敷ひまーをん又碧の進退ハ那折とをぐ。ふも縁連ハ相伴ふ男士わりて伴當も一百餘名ふ及ぶとふ曠野の戰ひをん史。亂智非如縁連を敷ひ捕るとも全勝をんとも最難かるべー。然るを單身ふち朝人ハ暴虎憑河ふ似ふとも敷ひ克ぬ父の仇雖もふふ由のをけまで有徒ハ和殿と甘木ハ毛野を援けと拄る敵を敷拂ぜ犬阪ハ必死地ふ入るをを生地ふ出るふ路をーん狹這義を以多かと論せば小文吾有理と応ぐ。ふも傷をんをべ現ハ大角感嘆ぐ。犬川生の高論ハ是兵法の貴ぶ所。敵を知り己を知りて後ふ勝負を定むべーとのふを道節諧ふひて犬川犬田のをそハふ犬阪の援助ふ足らぬ犬飼犬村両男士も那隊ふ向ひをか。

今番縁連と共伴ふ相模へ赴く副使ふ。竈門鍋介既濟越杉駱三一峯鰐崎悪四郎猛虎并ふ大石憲里の家臣仁田山晋五正使縁連と俱ふ五名皆是武藝わるめて就中猛虎ハ二十人の膂力わり。武藝尋常をねとも心術奸佞ふて縁連が腹心と憑まるるのをーー。鄙ふ河鯉權佐守如ふ犬阪毛野ふ説示せーと。竊聞ヒ具ふ知るとり有徒ハ犬田犬川犬飼犬村の四君子ハ二十名の精兵を従へ。使冥の処ふ伏躯ふ。丑立犬阪ふ縁連ふ敷ひ撃ひ撃るとれををべ隊兵を魚鱗ふ備へ。後を断前を遮り。鰐崎寵門越杉ハ捕ふ那縁連ハ。忽地羽翼を失ふ。首と犬阪ふ授くべー。這義ハ什生と其ふ。壮介ふ沈吟ーー犬山生の軍略ハ寔ふその圖ふ當るとハども。亂智も亦覚わる是蓋世の男士ふ。親の讎敵を敷ふ及びて許ヨヲの助大刀わ。せふ那人のを柄ふ。ふ也縁連を敷捕るとも迷ふ。俺ハを恨むべー。今ふそ。その說を定ふ。犬飼犬村二男士ハ船方の精兵を従へ。躯ふ勝負を覘ひ。甘木ハ犬田と共ふ那副使ハを殺崩ーー毛野の進

退をやもくせん低ても敵ハ退そ縛の難義ハ及びそのの折ハを犬飼も犬村生も隊兵を
找め戰を援けを然るとハ毛野も恨生ぞ縛十分ハ〻十ぞ〻危ぞとぞるべしと議をを
信乃ハ感嘆しその計謀ハ極め妙を渝智ハ面識らまてを大田犬川二君子のを就中
犬田生ハ石濱より七好も深かり進退ハ左も右も犬川生と商量をを又犬山ぞ五十子
攻ハ翌の時宜ハ憑るべけまぞ今這里ハて定めてかり軍議ハ是まぞるべしとを道節ハ
文吾現八大角有種們も俱ハ応く亦復餘談ハ及びけり程ハ道節ハ有種ぞ
伴當二名ハ雲妻時機審を其ぞ示七汝達ハ五十子の城の頭ハ潛めく緣連們ぞ城
より出をを見定めを低をの処も快走りかてを犬川犬田ハ報知ぬ這他のをハ筒樣々
とのハ伴當們ハをろをを舩を浦曲ハ寄をの高曙ハうち登りを五十子を投くいを犯ぞ且七
有種ハ准備の割箸をうち拔くハ大士ハ夜飯を羞め盃を薦めをを舩を司馬浦へ
漕ぎる程ハ現八と大角ハ莊介小文吾と迭代ハ石禾ハ存り一程のをを信乃道節ハ報

知て指月の道場の後住の入院ハ下旬ぞべしと伺をを某們ハその間ハ蓑生山へ赴をを
ハ件の時日嵩齟ひオハ中一日ハりを後住の老僧入院をれば、大法師ハ某們のかを
来ぬを俟ハ及ぶを且穂北も退んを石禾を立去ぬ一とを某們ハを知らぬを只何と
ぞ心をぞのをれ一ハより路草も咲ハぞ那寺ハ立ぞ一ハ縛低々と伺をを舩て石禾を
辞一去りを道德の迹を慕ひを夜を日ハ継て来るを道德ハ今も穂北の宿ハ留りてを
ぞ依と問をを訝る信乃道節ハ俱ハ眉根をを顰めて考ぬをを一昨日ぞをを
けまぞ、大法師ハ来ぞを且耗ぞ
道德ハ去向を急ぞく結城へ赴ををけんをの故ハ筒樣々々と里見殿の奉為ハ今番結城の
古戰場ハ廬を締ひを一百日の大念佛を修行七大炊殿季基を初と七大塚二戸井直
秀乃這他も當日陣歿の士卒の菩提を弔ん七ぞ一を報知をを信乃道節有種們
ぞ感ぞると大々ぞ〻ぞ〻ぞ肆月の祥月忌ハ必那里ハ赴きをの法莚ハ會ん七皆憑く

矣けり。有恁一程に有種が催促により船出をさせる。躬方の雑兵九十餘名大平駝五六艘に
のうち無りし千住河より来れけるが道節こなたを労ふくらく又高瞰の浦曲に赴き船を歇く
這里にて隊配を定るに船中身甲脆甲鏃眉尖刀をつらく執入さわりければ六犬
士いろめく擇令り身を擐ぬ准備をなす整ふ程に夜は丑三ふぬ登時道節に有
種ふうち對ひて和殿が船に留りし俺黨の本意を遂てかり来ぬを俟ものとなを有種笑
ひて逆の約束をけるが推辞奉るかりしかけるとも俱に這隊に有り某一人這船に遺
戰ひを外れるを願ふ伴ひ給へかと口説く道節推禁めて亦要急擬勢の和殿に親
しき妻子あり死をも他人に許せるも那定正は大敵の俺们勝とも負るとも退くこと能はず
船にもぬ更に難義に及ぶと是ぬ恢料なり有恁が我を敵に殺るも如りく這
船を成るもその功を奪ふべしとの義を恐れ諫めて兼引ぎけるが有種いろう及ばず
竟にその意に従ひけり。亦程に道節信乃荘介小文吾現八大角は躬方の雑兵を

従へ密々に陸に登りて高瞰の茂林の中に東西合を曉るを俟程に又隊配を相定め心
利る雑兵を亦五六名間諜とて那縁連ぐうへ五十子の城の動静を漸々に報せを
竊に那里へ遣ひけり。話分両頭是より先に麻生の鬼四郎の郷人们に鬼四郎が只ひとり
牛盗児を趕逐て司馬のくへ赴くを聞知りて相資んとて棒を携て蕉火を振照し塩濱
の閻魔堂の頭まで来れけるに堂前の杉に繋ぎて太く突殺されたる男女あり鬼四郎が
牛鬼もその樹下にわりけるが驚く什生と駭誤ぎく衆立ちて熟視れば死る男女の背
に寫着る數行の文字にて這男女は媼内船虫と喚做る強盗夫婦なりもあ
年来の積悪も今宵放免善悪平と鬼四郎を殺しるその吉文の趣まで問はで分明なりけるに
いとく驚怪きまく奇とて先鬼四郎と善悪平の亡骸を索出すに皆是鐵鞭傷にて
各所の深痍なりけるが又生ぐるもわるぐりけり。大家且く評議を疑ふに牛の角の血に深く染まれば強
盗夫婦は這牛に突殺されたるに疑ひなし。什麼何人が捕捕る。恁は計ひけるとのあらまし

知るよりこれまで却わるべかりしが近き村長が上を報じ地方の氏と共侶がその詰旦五十子の城内へ訴けり。去るかの日城外が支わりけるが沙汰が及ぶ第三日が至り有司詮議しく熊蛋と嬢内が首級を濱邊が斬梟けり。焜遠近が少えすけるが人咸嘆嘆せざるなく強盗夫婦を細めてその積悪を恁々と肯へ寫しめ那御堂の閻魔王の霊験がまあるとて参詣翠集るうちが小後數度の戰ひが堂宇頽破が及びが地蔵も閻魔の木像も甘木出寺が遷されて這里がまあるうちとぞ人鬼四郎が赤牛が強盗夫婦を突殺しる大功あるの童ぶとて鬼四郎が妻と児子がいうまもく鍾愛せりと亡者の一周忌がいて菩提の輿が

とて香華院があるせけり。是より七那牛が耕作車力の艱苦もあるぞ数歳が寺が蓁

選佛場が終りとぞ是等が後のるるを約めて共が寫しものを休題再説明るが正月廿一日

這朝五十子の城内が竜山免太夫縁連初の姓名が相模の北條家へ密議の使節を

奉りて未明より首途を縁連がの日のが扮が崩葱威の身甲が磨着の脛甲臑当しく上

衣が黒蛇皮絹の小袖が搭胸の衣二だり襲被て共羅紗の陣羽織が純子の野袴を穿

領に黄金表裏の両刀を擂脩が跨き桃花馬の太逞が雲珠鞍置てうち来る左右が

従が四個の若黨雜兵奴隷三十餘名前が立後が跟ぬ鎗柳笹長柄の傘鎧櫃杖雨衣

とて次第を乱を隨従を次が副使竜門既濟越杉一岑鰐崎猛虎仁田山晋五が五

人俱が劣らぬ扮を各々馬を拍せる這伴當も許ヨが小荷駝を牽を長櫃を舁りが。

遥後方が従て一町有餘陸續うち既がく縁連們が稍品草さうち過ぎ朝日初て日升る比

鈴森林の波打際を運迤と七徐行く程が前面の茂林の樹蔭より顆を出る一個の壮士是則別

人なり大阪毛野胤智之胤智這日の扮が白布の四天の下が細鎌の網衣を被て重藤早の立

擧の臑当が白布の顱巾七髪を後が振禁し一尺八寸の白大刀が匕首を帯副て小銃を引提

去向の方が立塞りて天地が鄭音く声高らかやを竜山免太夫本姓が篭山氏逸東太縁

連且く駐を件る寛正六年の冬十月杉門の里の這方が汝ぐ為が殺れる栗飯原首胤度が

毛野

乱れ合ひ
ひとち
身めく
大敵を
敵と

遺腹の第二の男子大阪毛野亂智あるわり。俱に天を戴ざる怨心の銃丸受て目見えと名
告も果ず鐵炮を含み直ち推向て火蓋を反て撞と放せば寃錯ず縁連の馬の胸骨撃ち摧
ま馬ハ屏風を倒ぶ如く矢庭に撲地と轉輾ば主の怵へず鐙を外て俱に地上に倒れ毛
の野ハ得ぬと鐵炮投棄大刀を真額に技殺て飛ぶ似くに走掛ば縁連が四個の若黨
迭に主を撃せずして推隔技連て防戦る刃の電光朝日に映じて眼を射ども勇る毛野ハ
物ともせず人ぬ境に入如く當るに儘て砂倒れ二人い首を撃落ば殘る深痍に
堪ずけん跌輾びて息絶ぬ有恁一程に縁連ハ稍身を起て四下を見るに鎗奴が棄て
逃るその身の短鎗ありけるを掻含りつ挾て足場を探りて田圃のさへ一町ばかり退くを毛
の野ハ追ども足ぬ縁連逃るとて何首を脱さんや蓬一返せと呼掛ゝ々蓬地に趕う
け。這回ハ長やうれど毎巻紙數に定限あれば縁連が末期の光景并に犬山道節が復
讐を寫ずして是より下の話説ハ又編を接ぎ巻を更め第九輯の冒頭に解分るを聽かし。

因に云大村大角の名ハ礼儀ゝを第六輯に見えまば論ず。然るを第七輯に礼度に作り
ゝ古人字訓のまぶを忘て則清を憲清儀清に作り時致を時宗に作り成氏を重氏に
作ゝる例もあれば深く咎るに足らぬとは雖も実に暗記の失ゝ本輯に改正て又礼儀に
作りゝ抑第七輯上下二帙に刊行の書肆先例に背く。作者の校訂を受ず製本發
行せしのまゝに就中誤寫ヨリ又只七輯のみならず毎輯書肆に發販を急ぐに校訂
夜ゝて日に接ぎ見選ゝる誤寫衍脱を忘れ異に其眼の君子正ゝ
又云信乃莊介道節現八小文吾大角毛野這七大士の列傳ハ既にその趣を畫ゝ獨大江親兵衛
のみ其の義勇を創ゝるに由りて第四輯に出世の時四歳の童子ゝ第九輯に大江の為に
立る胸色勘ゝ又七列小女 濱略・沼藺・妙真・音音・豆節・雛衣・代姫・其八犬士の皆薄命ゝ縁由及八犬士の身の痣の
形壮丹花に似ゝ第九輯に至て分解せん全書の圓圓近に成ぬ看官結局の日を俟ぬ。

里見八犬傳第八輯卷之八下套 終

○著作堂手集南總里見八犬傳第八輯下帙画者筆工剞人目次

出像畫工　柳川重信（印）

做書　五六七八上　谷金川
　　　五附録八下　墨田仙橘

剞劂　第五巻　淺倉伊八
　　　第六巻　横田守
　　　第七巻　櫻木藤吉
　　　第八巻上　原喜知
　　　第八巻下　田中二八

開巻驚奇俠客傳第二集
物[illegible]いよ〳〵佳境に入るとこの新奇限りなかるべし
本集五冊當癸巳春より賣出しに

第三集
第二集出板後引つゞき發行遲滞なし
本集五冊　共に精刊美帋製本

近世説美少年録第四輯
俠客傳二集三集出板の時引つゞき
發行遠からざるべからず　本輯五冊嗣出

松浦佐用媛石魂録
前編三冊後編七冊共ニ全十巻
後編近ごろ續刻なりぬ　置に也

美濃舊衣八丈綺談
戯曲にもろこしてさる駒才　[illegible]奇妙な
作りまうけたる因果物なりけり　全五冊

南總里見八犬傳第九輯
本輯を一部全璧とすべしと此の接續
刊行近きにあり　巻數未詳

大阪　河内屋喜兵衛
同　伊丹屋善兵衛
同　敦賀屋九兵衛
同　秋田屋太右エ門
同　河内屋茂兵衛
同　河内屋和助
同　秋田屋市兵衛
西京　出雲寺文次郎
同　村上勘兵衛
同　勝村治右衛門
同　杉本甚助

東京　須原屋茂兵衛
同　山城屋佐兵衛
同　小林新兵衛
同　丸屋善七
同　和泉屋市兵衛
同　須原屋伊八
同　出雲寺萬治郎
同　椀屋喜兵衛
同　近江屋半七
同　長門屋亀七
同　三家村佐平

名山閣
東京芝大神宮前書舗
和泉屋吉兵衛發售